

東京大学教育学部附属中等教育学校での予防カウンセリング

—— 高校3年生を対象とした授業実践 ——

報告者 ほっと・ルーム（学校臨床総合教育研究センター分室）相談員 瀬戸 瑠夏

1. はじめに

筆者は、今年度初めて、附属学校での授業（「総合心理入門」全20回）を担当した。他3人の担当教員と共に授業の進行役を務めたほか、第15回目では、「学校」をテーマとした新たな授業案を作成し、実施した。また、第1回～第11回の授業実践をまとめ、2003年度の本研究科紀要に投稿した（亀口・角田・瀬戸、2003）。

本論では、1年を夏休みはさんで前・後期に分け、各期の授業実践を振り返る。前期については研究科紀要への投稿論文を踏まえつつ、また後期については第15回目の授業実践を中心に、授業全体に対する筆者の印象を交えながら報告する。

2. 前期（4月～7月）

前期の授業では、数回ごとに同一のテーマで授業を行った。ソーシャル・スキルを高めるためのコミュニケーション（第2回・第3回）やアサーション（第4回・第5回）の学習、友達や自己を知るワーク（第6回）やエゴグラム（第7回）の体験、将来の進路を考える「夢プロジェクト」（第8回～第10回）の実施である。

前期終了後、筆者は、本授業が予防カウンセリングの一環であることを踏まえ、学習者が授業で学んだことをどのように咀嚼し、現実場面で活用しようとしているかについて検討した。方法として、授業に対する生徒の感想、授業中に生徒が記入したワークシート、夏休みのレポートをKJ法によって分類した。その結果、3つのカテゴリー、[I]授業の内容に照らして自分自身のこれまでのあり方を振り返り、また自己や他者に対する理解を深めること（“自他の見直し”）、[II]よりよく生きるために、学んだことを応用する場面・方法を見出すこと（“応用”）、[III]授業の内容を自らの考察と解釈によってさらに探究していくこと（“探究”）を得た。これらのカテゴリーからは、生徒が授業を通して自分の姿を見つめ、よりよく生活するために学習内容を生かしていること、また時にはより深い検討を重ね、学んだことの意味を問うていることが、推測された。逆に言えば、自己の見直しやより深く生きるために、本授業が寄与していたと考えられる。

加えて、生徒の“自他の見直し”“応用”“探究”を促進するためには、授業進行上の工夫も欠かせないことが示唆された。各回の授業開始にあたって、その回の概要をあらかじめ示すこと、どのような体験を行う授業なのかを学習者に分かりやすく伝えることが重要である。また、これらの学習様式を促すような事例の提示やワークシートの構成—たとえば、授業で学んだことを参考に、これまでの自分自身や周囲の他者についてどのようなことがわかるのか、また授業で得たスキルや知識が今後の生活にどのように応用できるのか、またその際の留意点は何であるのか、等々について考え記述する時間とスペースを組み込んでいくこと—が有効であろう。

以上の研究によって、授業の効果と授業運営上の改善点についての示唆を得ることができた。ただし、今回の研究対象は今年度前期の授業であり、後期の授業の検討は、次年度以降の課題である。

3. 後期（9月～12月）

後期では、1回ごとに授業のテーマを変え、さまざまな角度から、生徒が自分自身や周囲の環境について考えられるようなテーマを設定した。たとえば、第14回では身体的な健康について考え、第16回では校内に植えられている樹木との「対話」を試みた。

また、第15回は筆者が新しく授業案を作成し、「学校ってどんなところ？」をテーマに、考えを話し合ってもらった。筆者がこのテーマを設定した背景には、卒業間近の生徒たちが残り少ない学校生活を積極的に過ごしながら、母校に対するさまざまな思いを味わうことを促進するというねらいがあった。加えて、高校生が学校という場の“意義”をどのように考えているのか知りたいという、筆者の興味関心があった。実際の授業では、①「これまで学校に通い続けてきた理由」、②「6年間の生活で体験したこと、したかったこと」を手がかりにしながら、③「学校ってなに？」ということについて、段階的に考えを深めていけるように課題設定した。課題に対する生徒の回答は、「将来のために行くところ」「社会生活のための基盤を身につける場所」などの、義務感や制度上の消極的な理由が多かった。筆者は、そのような回答が出

ることをある程度予測しており、「それに従わないこともできるはず」と問い掛けてさらなる考えを促した。しかし、その後も抽象的な議論が多く、生徒の実体験に即した積極的な意見はなかなか出なかった。一方で、授業に対する感想を検討すると、たとえば「いろいろな人との意見交換ができてよかった。日頃、特に考えることのないテーマについて考え直すことができました」「今まで学校に通いつづけた理由を問われた時考え込んでしまった。『行かなくちゃいけないという義務感』と答えたけどよく考えてみるとそれっておかしい」などの感想があげられ、学校という場所について考え、意見交換することのおもしろさや学校について改めて考えた生徒が多かった。身近な場でありながら、普段考えることのない学校に対する問いは、生徒にとって新鮮であり、また意味深いものと捉えられたようだった。次年度以降は、より生徒の実感に基づいた意見が出るように進め方を工夫しながら、このテーマによる授業を洗練させていきたい。

一方、後期になると、担当教員と生徒の関係、生徒同士の関係が安定し、互いに親しみを持って授業を作っていくようになった。筆者自身にも余裕が生まれ、机間巡視しながら生徒たちとやり取りをし、それぞれの個性に応じた適切な関わりを行えるようになっていった。そのような変化の過程の中で、生徒Aのことが、筆者の印象に強く残っている。

Aは、美術がとても得意であり、プリントの端によく絵を描いていた。一方で、人と関わるのがあまり得意ではなく、シェアリング（意見の共有）の時間にも、積極的に自身の意見を言う姿はあまり見られなかった。また、シェアリングの時間も後半になると、大半の生徒たちがおしゃべりに興じるのに対し、Aは1人で黙々と絵を描いていることが多かった。年度の当初、私たち教員は、授業を通してAのソーシャル・スキルを伸ばしたいと考えていた。1人で絵を描くのではなく、他の生徒との交流を促す働きかけを心がけた。筆者自身もAに対して、

授業に参加するように、さりげなく話し掛けることに努めていた。

しかし、Aの授業でのようすや授業への感想に触れるにつれて、しだいに、AにはAなりの大事な世界があるのだと感じるようになった。それは、私たちが容易に踏み入って作り変えることのできない世界のように思われた。言語による積極的な自己表現を期待するのではなく、そのような彼女の個性をそっと見守るべきだと考えるようになっていった。

そのように考えながら、さらにAのようすを観察していると、おもしろいことに気が付いた。彼女の描いていた絵を周囲の生徒たちが目にし、「上手だね」「それ、私にも描いて」と言うようになった。Aの描いた絵が他の生徒たちの注意を引き、Aと生徒たちとのコミュニケーションを媒介していたのである。Aにとっての絵は、言語表現以上に雄弁に、彼女の個性や考えを伝える手段なのだと感じた。それ以降は、「授業時間である」というこだわりを捨て、Aの描く絵や作っている作品そのものに目を向け、話し掛けるようになった。1年も終わりに近づいた第19回目の授業中、Aはグループ分けに使ったくじの紙で、何か作っていた。「何作ってるの?」と話し掛けると、Aは「くまの顔」と言いながら、紙で立体的に作った作品を繊細な手つきで整えながら、筆者に見せてくれた。その日のAの授業アンケートには、「くまの顔が上手くつくれた」という感想とくまのイラストが書かれていた。筆者は、少し苦笑いを浮かべつつも、しかしとても温かな気持ちで、生徒独自の世界を守っていくことの大切さを、改めて感じたのである。

<参考文献>

亀口憲治・角田真紀子・瀬戸瑠夏「授業の『場』における予防カウンセリングの実践課程」2003『東京大学大学院教育学研究科紀要 第43巻』